

勝福寺寺報

ひびき

第109号

2024年5月1日

南無阿弥陀仏 ～人と生まれたことの意味をたずねていこう～



## 阿弥陀のいのちの時

夜明けを告げる鐘の声を聞きながら、新しい一日が始まります。

私達老人三人の暮らしに、次男一家が加わり、娘母子が会いに来て、乳幼児（五ヶ月、六ヶ月、3歳）から百才の母の、裸のいのちの時間に、乗せられ運ばれていく生活が開かれています。

自分の自由な時間が欲しくて、その心に追いつてられながら生きてきましたが、今、いのちの時間に帰らされているように思います。私達の思い計らいを超えたいのちの道理を、いのちは生きていることを知らされず。

幼い子供達を通して生まれ育ちゆくいのちの時を、そして百歳の時を生きて、老い病み死に迎えられるいく母のいのちの時を、阿弥陀のいのちの時として与えられていることが知らされず。

この時間は誰にも平等に、確実に刻まれています。遅からず、速からず、自然の流れのままに私達のいのちを運んでいきます。いのちを私有化し私物化し、時間を忙殺して生きている私達に「いのちに帰れ！」と呼びかけてくれています。

藤谷純子

報恩講 法話 (二月二十八日後半)

## 能登を憶い

おも

## 能登に学ぶ

太田浩史先生

(富山県・大福寺住職)



## 真宗は立ち直りが早い

2011年の東日本大震災の時、福島県の浜通りは地震・津波・放射能と3拍子揃っていて、その年の報恩講はできないだろうと言われていました。傾いた本堂をまっすぐにし、壁だけは何とかふさいで報恩講を勤めました。他の潰れたお寺も、まだ門徒さんらが仮設住宅に住んでる段階で浄財を集め、まず自分達の道場を復興したんです。

関東大震災と東京大空襲を体験した柳宗悦も「たとえ震災、火災、

戦災に襲われても、最も復興の迅速なのは真宗である。この点では他の宗派は及びもつかぬ。戦時中幾多の梵鐘が供出に潰れたが、早くも朝夕に鐘が鳴り始めたのは真宗の寺々である。それほど信徒の熱意が寺を眠らせておかない」と述べています。

## 寺を道場に還元する

さらに、柳は、「もともと寺院僧侶を持つことが、真宗の面目を失わしめているのである。このままでは他の宗派と何も異なるところがないではないか。宗祖の偉大な「非僧非俗」の立場が傷つけられているのではないか」と述べています。

今、葬式が家族葬になってきて、葬式も行われなくなれば、お寺の懐具合も淋しくなるのではないかと心配し、寺院数の減少を予測して、それを仏教の危機であるかのように対策を考えていますが、それより大事なことは「僧に非ず俗に非ず」です。

柳は、「もし真宗が寺院を放棄して道場に還元するならば、一段と新たな力を輝かすであろう。そして僧侶がその位置を捨て、平の在家の信徒として立つなら、この宗派は著しい特色を発揮するであろう」とも述べています。

「寺院を道場に還元」というときの「還元」は、辞書に「根本的なものに戻す、また戻ること」とあります。「非僧非俗」とは、僧(出家)と俗(在家)が2つに分かれる前と後で、2つに分かれたらもう「根本的」とは言えない。僧と俗と2つに分かれてしまえば寺院になり、非僧非俗に戻れば寺院が道場に還元されたこととなります。

## 妙好人

みょうこうにん

柳は、この親鸞聖人の「非僧非俗」の生き方を正しく受け継いだ姿を妙好人に見出し、それを「平の在家の門徒」と言いました。「平」とは元々の底辺という意味です。だから、僧侶も門徒も平等に妙好人に還元されれば、寺院は即座に道場となり、大谷派は親鸞聖人や蓮如上人のように、如来から与えられたものすごい力(他力)を発揮するようになる。それが、住職が門徒の熱意に依存して伽藍を復興することよりもっと大切なことだと、柳は述べています。今こそ寺院が道場になる絶好のチャンスなのかもしれません。

## いのちのセーフティネット

この道場というものはどのように

してできるかというと、20人位の人たちが集まって仏法を語り合うお講から始まるんです。それがいくつかが集まったら「集会所が欲しいね」ということで説教小屋が建てられ、それがお寺になっていったのです。リーマンショックの頃、日銀の関係者が「もしブラックマンデーのような株式の大暴落が起こって社会が崩壊しそうになったら、真宗大谷派は半年以内に10万カ寺作ってください」と言いました。彼が言っているのは伽藍のことではなくてお講のことです。「何のため？」とたずねると、「お講がいのちのセーフティネットになります」と言いました。

セーフティネットというのは、「金儲けしなくてもいいから、命だけは守れる」仕組みをいいます。地元の人との繋がりがいのちを守るんです。今の七尾市がそうです。七尾はもともと地域住民の助け合い・隣組が非常に充実しておりまして、震災直後から独り暮らしの家が特定されていて、水と食料が運ばれていました。

無理して伽藍を建てなくても、このセーフティネットによって社会を強くし魅力ある郷里にすれば、人口の流出も避けられるし、新たな交流人口も生まれます。そこから積み上

ける方が復興は早いと思えますね。

### 能登の土徳

珠洲の港の近くに西勝寺というお寺があつて、ぺちゃんこに潰れた姿がニュースに流れました。この寺の住職は西山郷史という学者で私の先輩です。この西山さんが書き残したものを讀むと、能登がもっている可能性が何となくわかつてまいります。この地震の前から能登は非常に深刻な過疎に見舞われておりました。昭和14年からみても約百カ寺減つてます。その状況の中で西山さんが何を感じ、何を考えていたかが今更にして思い起こされるわけです。

「親鸞土着」と言つたのは大桑齊先生であり、「能登の土徳」と言つたのは西山さんでした。西山さんが能登の輪島市神明原という村を訪ねました。そこは過疎が進み、二人の世帯と一人の世帯があるだけです。そこを尋ねて「いろんな行事が行われなくなりましたね、寂しいね」と話しかけたら、「若い者はこんな山には帰つてきませんしね」と相づちを打つおばあさんの表情は、言葉と違つて明るいものでした。「寂しいね」って言つたら、「ほんまに寂しい」って泣くかと思つたら、明るい屈託のない笑顔。あの明るいこ

わりのなさはどこから来るのだろうか、と西山住職は疑問を持ちました。

### 御講や一人の信に光る村

8年後にまた訪ねると、村人はさらに年を取つていた。ところが不思議なことに、その田や畑の景色が前にも増して色鮮やかで、輝きが増しているように見えたというのです。これ、一体なんだろうね。第二十三代彰如上人は俳号を句仏上人といわれましたが、「御講や一人の信に光る村」という句を詠んでいます。お講の開かれていた村に一人の信心の人が生まれた、そのことで村が輝いている、というのです。

一人の信心がその村にもたらした光は、たとえ村人がいなくなつても消えませんが。親鸞聖人のご旧跡などに行つたら、それを感じますよ。「親鸞さんがここにおられたんだな」と、そこに光を感じます。神明原のおばあさんも、その光を阿弥陀様から与えられたものとして感謝し、信頼しきつていたのでした。

先祖への感謝、土に対する信頼をもたらずはたらきを土徳といひます。「ここはこんなに寂しくなつたから、負けちゃおれん。頑張つて復興せないかん」と、そんな話じゃない。先祖から如来さまとの繋がりを付けて

貫つているので、たとえ自分の代で家が終わろうとも、土徳を信頼している明るさがあるわけです。

### 親鸞土着

大桑先生によれば「親鸞聖人がその土地に土着して、新たな親鸞聖人を次々に再生していく力が土徳です」。この土徳を原動力とするのが真宗の道場です。大桑先生は、「ひとつの教えがその土地の暮らしそのものとなるのに五百年かかる。五百年かけて、親鸞聖人がその土地に土着なされて、一文不知だけれども信心の輝きをもつて生きていく妙好人が誕生した。これを親鸞土着という」と言われていきます。

「過疎問題をかかえた上に震災にあつて気の毒に。この村、こんな調子で大丈夫かね？」と言われるが、大丈夫であるはずはない。でも、「五百年後を見てください」と、こゝろを言えるのが土徳の世界です。必ず親鸞聖人がそこに灯をともしつてこゝろです。

「新たな親鸞聖人」とは、言うまでもなく非僧非俗の妙好人なんです。親鸞土着は親鸞再生なのです。この土徳を原動力とするのが真宗の道場です。今の真宗寺院はお金を原動力にする傾向がありますが、それを土

徳に変換するのが真宗における還元です。土徳に戻す。それはちょうど、今日の火力や原子力発電を、太陽の恵みによるエネルギー源に変換するようなものです。

### 能登支援の真のありかた

「電力の父」と呼ばれた松永安左衛門は、「決して過去を悔いてはならない、未来を悲観してはならない」と言っています。過去にはおどましいことや恥ずかしいことが多くありますが、それをそのまんま認めて、宿業というものを逆にエネルギーにする。なぜそれが可能かというと、道場は本願の力で成り立つておるからです。

だから、自分の力で何とかしようともがくんじゃなくて、神明原村のおばあちゃんみたいに明るく信頼して、本願の莊嚴の力を信じて、如来さまのおはたらきを拝ましてもらおう、というところから始めていく。私達が能登の真宗門徒やお寺さんに繋がつていける道はそれしかないと思ふんです。私達全国のお寺が一斉に、「親鸞聖人の精神に還る。お寺を道場に還元する。だから能登の人たちも一緒にやろうよ」と。これが本當の支援、平等の復興じゃないでしょうか。

# ご門徒さんこんにちは！ 第二十九回

今回は四日市にお住まいの渡辺義孝さんをお訊ねしました。義孝さんは以前、ひびき98号で紹介した四日市で自転車をなさっている綱義さん95歳のご長男です。年齢は今年60才になります。

姉弟は9歳上の市内に住む姉さんと4歳上の大分市に住む姉さんとの三人です。お仕事は中津市にある中津少年院に薬剤師として勤務されています。

## 少年院ってどんなところ？

少年院とは全国で50ほどある法務省矯正局管轄の施設で、義孝さんが勤務する施設は九州、四国、中国の家庭裁判所から保護処分として送致された情緒未成熟等により専門的な治療教育を必要とする人を対象としています。現在14才から20才迄の入所生がいるそうです。義孝さんはその施設で常駐の医師、看護師と共に入所生の医療を預かっています。

## 何か縁を感じます

義孝さんが薬剤師という仕事を選

んだ理由は一番上のお姉さんから「薬学部も受けてみたら」と勧め

られたからだそうです。また、中津少年院に勤めるようになったきっかけは、大学に少年院から求人があり、就職担当の教授から「君の近所であれば見学に行ってみる気はないか」と声をかけられたことだそうです。以来、ずっと勤務さ

# やめじきは家族の絆！

## 渡辺義孝（四日市）

れています。これも縁というか、不思議なことだなあと思うそうです。

## 家族の絆

この就職を一番喜んでくれたのは義孝さんが幼少時、小児ぜんそくがひどく、夜中に発作が起きると近所の病院に背負って連れて行ってくれたお母さんでした。

お母さんは14年前に亡くなられましたが、晩年は孫達の成長を楽しみにしながら過ごすことが出来たことや、今日一日が無事終わることに感

謝をこめて義孝さんは毎日、お仏壇に手を合わせているそうです。

さて、次に奥様についてお尋ねしました。奥様は京子さんです。年齢は4つ違いの今年56歳になります。同じ四日市の出身で、お仕事は義孝さんと同じ薬剤師です。奥さんも義孝さんと同じ大学の出身で、同じ教授の指導を受けていたそうです。

義孝さんご夫婦は二人の男の子に恵まれています。上の子は小さい時からお天気に関心があり、環境

系の大学を卒業して現在、氣象関係の仕事に就いていて、子ども時代からの夢を叶えています。そして、弟さんはお兄さんとは興味が



異なり、現在理系の大学に通っています。

義孝さんに趣味を尋ねると写真撮影だそうです。特に飛行機撮影は航

空祭などを通してたくさん写真仲間がいるそうです。優しい人柄の義孝さんは誰からも好かれるんですね。

## 頭が下がります

現在、義孝さんはお父さんの隣の家に住んでおり、食事等は一緒になされていますが、お父さんが骨折で足が少し不自由になったため、お店は閉めています。お父さんの健康のため義孝さんが横について介助をしながら週に1回程度お店を開けたり、散歩に連れて行ったりしています。話しを聞くだけでその親孝行振りが伝わってきます。

## 気になること

さて、最後に勝福寺やその他のお寺も含めて気になることはないか尋ねました。

義孝さんは「どこのお寺も同じでしょうが、門徒さんの年齢が高齢化していることと人数が少なくなることで活動が縮小し、寂しいなあという思いがあります。なにか協力できることがあればと思っています」と答えてくれました。

勝福寺も同じ悩みを抱えています。どうぞ今後とも勝福寺の維持・発展のため、ご協力よろしくお願ひします。（文責 渡辺重昭）

弔辞

「松本 順さんへ」

牧本 和孝

宇佐市大塚にお住まいで、永らく勝福寺の役員を務められると共に、子ども会のお世話まで全力で尽くしてくれて、みんなから愛され慕われた松本 順さんがさる3月13日亡くなられました。享年69歳でした。その葬儀での牧本和孝さんの弔辞を紹介します。

順さんと出会ったのは、お寺の聞法会が初めてだったですね。

其のころから宇佐ふるさと登山会でも行動を共にし始め、十数年の付き合いになります。

とても活動的で力持ちだった貴方が、こんなにも早く亡くなられて、悲しくて遣りきれない気持ちでいっぱいです。

沢山の思い出があります。勝福寺の報恩講での寸劇『なんだろうなのまこっちゃん』では、仏様

の格好を手作りでされ、それが妙に似合っていて参加者を大いに笑わせてくれたものでした。

寺主催のたんぽぽ子供会を、春は桜を観ながらサイクリングとバーベキュー、夏は富貴野の滝で滝つぼの中までロープを張っての泳ぎとボート遊び、年末には順さんの



順さんが阿弥陀さま・知代さんが親鸞聖人

家を借りての餅つきなど、全部の行事で子供たちを楽しませるのに、準備からお世話まで全力で大活躍でしたね。

登山会では、いつも救急医療品を携えてシンガリを歩き、疲れ切った人や、こむら返りで歩けなくなった人のお世話をされてましたね。そして、京都の東本願寺から、

福井県の一番北にある、あわら市の吉崎別院までの修行ともいえる蓮如上人御影道中の参加がありました。上人の御影を御輿に入れ、特製のリヤカーに乗せて引つ張り、片道二百数十キロメートルの距離を、四月末の残雪の中の峠越えを、十数人の同朋と共に歩きとうした



御影道中（編み笠=松本・左端=牧本）

事が鮮明に記憶に残っています。

この期間中も、参加者のみんなに松本クリニックと言われるほど、みんなの靴擦れや足に出来た肉刺の手当に大忙しでしたね。

三回目の参加では、供奉人と言われる道中全体を世話する役に抜擢されておりました。身近な事では、野菜作りが上手

で雑草一本生やさない畑で収穫した食べ切れないほどの物をよく頂きました。

また、なば（茸）取り名人と言われる程の豊富な知識を持っておられ、「これは大丈夫、それは食べない」と教えてくれましたね。

もう一つ、私が感心することは、大変な家族思いの人で、家族を話題にするときは奥さんを千代さん、息子さんを信ちゃんと呼称をつけて話をされること。

そして、自分の大変な闘病と同時に奥さんのお世話を、ここまで出来るかという位されてきたことです。

このような沢山の思い出がある順さんと親しくお付き合い出来た事、本当に有難うございました。どうぞ安らかに眠りください。



松本鈴奈（豊川小4年）

元旦におきた能登半島地震では輪島に住んでいた次男一家も、風さんの実家・龍昌寺も半壊状態になりました。その時の体験を風さんに書いていただきました。また『よろみ通信』に掲載されていた風さんのお母さんの手記の一部も転載させていただきました。

支えられて

藤谷 風

この度はたくさんの御心配と御支援をいただき、ありがとうございます。私たちは2月半ばに能登から宇佐へ、家族4人と猫と、みんなして避難してきました。あれから丸3ヶ月が経ちました。こちらでは桜が満開を迎えています。

地震は、誰かが「洗濯機の中にいるようだった」と言っていたように、尋常じやないあの地響きの音と揺れが体に染み込んでいるようで、トラックの走る音やガラス戸の音など何かちよつとしたことで今だにドキリとしたりします。

スマホの写真を見返せば、あの日、地震が起きる30分ほど前の、何も知らずに微笑む私たちの家族



写真がありました。30分後、何が起きるかなんて誰も知りもしない、そういう「今」の連続のはずなのだろうけど、朝ご飯を食べれば、さてお昼は何にしようとか知らぬうちに頭の中はいつも先回りしたり後ろを見たりと、いろいろな思いで忙しくしていることに気がつきます。

あの日から、今までの日常には戻れないでいます。爪切りひとつとっても、うちで使っていたあれが恋しいなんて、そんなに執着してはいないと思っていたけれど、あの家であの物に囲まれていた暮らしが懐かしく思い起こされます。思い返せば、宇佐に来るまでの居候先でも、いろんな人のお世話になって助けてもらって、ようやく宇佐まで辿り着くことができました。大変だったのは大変だったけど、本当に支えられたばなしでした。宇佐に来てからもまた、助けてもらいながらの毎日です。こうしてまた新しい日常を送れていることは、当たり前のようにたぶん当たり前ではない、そういうことを少し知ることができたのではないかなと思います。

5ヶ月になった赤ちゃんの吸い込まれるような瞳に、2歳10ヶ月になったお兄ちゃんの元気なぼたぼたした走る音に癒され、元気をもらいながら、また毎日を送っています。

日常と非日常

村田啓子

それは今までにない怖いほどの星の数だった。闇によって浮かび上がってくるものがある。輝き出すものがあることを知った。

2024年元旦、午後4時10分、震度7の激震だった。その恐怖はトラウマとなって、少しでも揺れると蘇る。

ここで水も

電気もない生活が2週間ほど過ごし、それぞれがそれぞれの場所に避難した。私はそこから友人の家、故郷の甲府、親戚の家と、一ヶ月半の避難という旅に出た。そこで私は非日常だからこそ多くのことを知り、学ぶことになった。



どうして人は人に優しくできるのだろうか。私が被災者だから、私の友人だから、それとも本来慈悲的な心をもっているのが人なのだろうか。それぞれができる限りのことを日常の延長として受け入れてくれた。数日間とはいえず私にもそのようなことができるのだろうか。そればかりではなく、私の知っ

ている範囲を超えた知識、世界、まだ見たことのない風景を友人を通して見せてくれた。たぶん一步を踏み出さなかつたらそのような世界は知らないでいただろう。

また、不思議なことに、私が被災という負を抱えていたからか、こんなときだからとばかりに老化、認知症、そして個人の闇について話が交わされた。それによってお互いに心が暗くなったのではない。むしろ底の方で繋がった感覚だった。

ふと思った。私にとって地震は非日常であるが、地球の歴史からすると、これは日常といえるのかもしれない。今回のことで失ったことよりも多くのことを得たと思っている。私にとっての財産は友人たちだった。そして、私がいて人がいる、のではなく、人がいて私がいる、と。

そして最後の地点、七尾市に向かった。そこには娘と孫が避難していた。娘たちは住んでいた家が壊れたため九州へ一先ず住むことになっていた。七尾で出逢ったのは生まれたばかりのぷつくり、ぷに。ぷにのまあるく柔らかい命の始まり。そしていつしか「けいこしゃーん！」と言えるようになった子どもの成長だった。「はい！」私も元気に声で応えた。その声の中で大きく響いている。また、はじまりだ。そう、これからは日常の中にきらきらを見つけてゆこう。

勿忘の鐘を鳴らして

向野理恵



3月11日、2011年の東日本大震災から13年が経ちました。会の始まりに際して、ご住職と坊主さんからお話があった中で、

まさに諸行無常であること、地震が起る確率がゼロに近いと言われても実際起こることを聴き、平穏な日常がいつもあるわけではない、と危機感を覚えました。

お経の後、サイレンの音の中、黙祷し、皆で鐘を代る代る撞きました。何もできない無力な立場ではあるけれど、せめて心を鐘の中に乗せて寄り添うことができればと願うばかりです。

鐘を撞き終え、スライドを通して能登半島地震に関わるムービーを鑑賞させていただきました。地震による被害の中心であった珠洲市の高屋という地域は、珠洲原発の予定地だったそうです。立地要望が来たのに対し、反対運動が

さあ、今年も「新」にして「勿忘(わすれな)の鐘」をひびかせよう!

13年目の「3.11」が近づいています。特に今年は能登地方にM7.6という大地震が、それは親類や友人が再会を喜んだ元旦早々に襲ったという幕肉けでした。江戸時代より「能登はやさしや土まじり」といわれた大地は切り裂かれ陥没し、山は崩れ、町は破壊され、人々の住居と生活を奪い取ってしまいました。その地珠洲原発が阻止されていたことが幸いでした。都市が健全であるためには、豊かな地方を支えたいという思いがなくなり、痛さを感じました。都市の繁栄のために地方を犠牲にするような日本では未来は暗い。安危を共に生きる生活をしていきたいと思います。

2024. 3. 11 日程  
午後2時 勝福寺本堂にて 読経 焼香  
2時46分 忘れな鐘をつく  
3時頃より、ユーチューブ 観賞  
・珠洲原発撤回運動の始終  
・撤回運動の中に居 月障子住職夫妻の  
震災後のインタビュー

皆さまのご来場をお待ちしております。勝福寺

しかしそれ  
に、対し、電  
力会社は安  
全キャンペーン  
で「地震  
がきたら  
大丈夫」の  
キャンペーン  
が  
入ったパン  
フレット等



公原義翔 (豊川小・6才の時の絵)

子ども美術館

を配布します。珠洲市は能登地震が起る3年前から群発地震が続いていました。原発が建設されな  
いまま、今回の地震が起ります。  
「地盤が隆起した分、港に船がつ  
けられない」と話していた漁師の  
方が、もし原発が建っていたら、  
震災はもっと悲惨になっていただ  
ろうとも仰っていました。  
しっかりとるでない我が身だから  
こそ、東北や能登の震災を決して  
忘れないようにし、備えたり考え  
たりしておかねばならないな、と  
思いました。

福島県いわき市の光景寺さんの寺報『煩惱林』に載っていた「勿忘の鐘法要」の記事を転載させて頂きます。

3月10日(日)に勿忘の鐘法要を行いました。参加者で勤行(おつとめ)をした後、鈴木君代さん(僧侶・シンガーソングライター)のライブを聞きました。鈴木さんは昨年の「勿忘の鐘」法要でも歌を披露していただきましたが、今年も京都からはるばる福島へ歌を届けてくださいました。法要に心を寄せてくださった皆様、ありがとうございます。



リレー随想

「弥陀の本願信ずべし」

釈和敬 (渡辺和義)

浄土真宗の宗は、「本願を信じて念仏をもうさば仏になる」簡にして明瞭な教えです。しかしながら、この「本願を信じる」ということがなかなか難しいのです。

私は、10年前の本山での推進員研修をご縁に、中津市三光の長仁寺前住職の江本常照先生の会座に参加させて頂いています。また、我家にも三月毎に来ていただいて「本願道場聞法会」を開催しています。

会座の中で最近気づかせていただいたのは、「機の深信は他力である」ということです。言葉は聞かされていたのですが、いま一つ納得いきませんでした。「ご本願に遇うということは、自分にあること」(大石法夫先生45信)、「宿業を知らされるのは如来のご回向」(歎異抄聴記)という言葉により確認させられました。

気づかせていただくと、いつも義を立てて、相手の非を責め立てている邪見(きょうまん)橋慢(きょうまん)な自分の姿が見えてきます。自分では気づくことはありません。如来様のご回向(えこう)によって気づかせていただけるのです。

南無阿弥陀仏

勝福寺写真日誌

勝福寺報恩講 (1月26日〜28日)



勤行



久方ぶりのお齋



お華束つき



ご法話



お荘厳



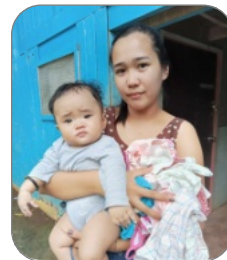
市長さんから百歳のお祝



12月31日 除夜の鐘



12月23日 ミンダナオ子ども図書館に荷物到着



勝福寺さま

昨日、支援物資6箱が無事に届きました。衣類、靴、カバンなども、必要に応じて子どもたちに配布いたします。たくさんのご支援に大変感謝しています。現地スタッフ 宮木 梓

あとがき

今年は元旦から能登半島地震がおき、被災者はもちろん、私たちも、大地が揺らいでいるような感覚に包まれました。

そんな中でも、朝が来てまた夜となる一日を、しっかりと生きねばなりません。そのことを、地震に遭った風さんとお母さんの手記から教えられました。

それから、勝福寺とご縁が深かった龍昌寺、願正寺を中心に、能登教区へ、皆さんから寄せられたカンパに報恩講の御法札を合わせて義援金として送らせていただきました。(知道)

今号では今までの感謝を込めて、松本順さんの特集を組みました。有難うございました。(重昭)